



つばさっ子

2014年 1月号



あけましておめでとうございます
本年もどうぞよろしくお祈りします



今月の行事



16日(木)	18:30~20:30	パパ懇
18日(土)	9:00~11:00	ひよこ懇談会+試食会
25日(土)	9:00~11:00	ぞう懇談会+試食会

今月の全体職員会議は、1月30日(木)です。18:30までのお迎えのご協力をお願いします。

源泉徴収票・課税証明書 提出期限 1/31



保育所継続申請の提出書類です。該当の方は忘れないよう提出して下さい。署名欄に必ず署名し、貼り付けてから提出して下さい。

※源泉徴収票はコピー可です。

※課税証明書・在学証明書(保護者が学生の場合)は原本が必要です。兄弟分はコピー可。

祖父母招いてのクリスマス会 12/20

10月に予定していた祖父母懇談会が台風の影響で中止となりました。その後「うちのおじいちゃん、おばあちゃんめっちゃ楽しみにしてたのに」の声がちらほら保育士の耳に届き、。クリスマス会の実行委員会の第一回目の会議で、ぜひ祖父母を招いてのクリスマス会をやろう!ということになり実現しました。(40家庭54名の参加)



←ブラック
パネルシアター

0・1・2歳の
クラスに現れた
サンタ!!



伝えたいこと パート1

市原悟子

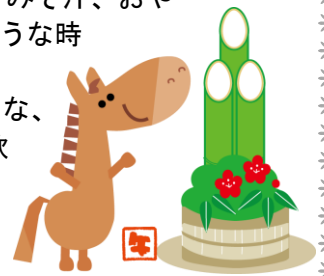
つばさっ子の原稿も残り3回です。そこで私のアトム歴を紹介しながら、どうしても伝えておきたいことを書くことにしました。35年間を振り返って一言で表現すると『つくる』に集約されると感じます。

1978年8月にパートで働き始めて、1979年4月に正職になりました。0,1歳児の乳児16名、職員5名の小さい保育所でした。職員の中で最年少の私は25歳でした。

園での様子を伝えるのはハガキサイズの大学ノートに食事、排便、午睡時間を記入するだけ、行事もなく、懇談会もなく、職員会議もないという何もない保育所でした。もちろん給食もなし。食事、おやつは毎日、保護者がタッパーに詰めて持って来る。直接、離乳食をお鍋で持って来る人もいました。それらを冷蔵庫で保管し、電子レンジで温めて食べさせるという状態でした。現在当たり前のように行われているほとんどのことがその当時はなかったのです。想像してみてください。登園前の食事作り……。その大変さをなんとかしたいとあるお母さんが「当番制の一品持ち寄り」を考え出したのです。ご飯、みそ汁、おやつは保育士が保育の合間に作る。自園給食を確立するまでにはこのような時期があったのです。

現在の各種懇談会はすでにこの頃から行っていました。現在のような、入園・卒園式はなく、年度末日に「お別れ会」と称して、お菓子、飲み物でお互いの労をねぎらうという内容でした。

私の35年間を3つの時期に分けると中身一つずつ『造った』最初の10年でした。



伝えたいことの一つは「三つ子の魂 百まで」の正確なことわざを理解してほしいということです。

この言葉は「3歳までにしつけをしなればその後では間に合わない」又は「習い事は3歳までにさせた方が良い」とか本来の意味とは違った解釈をする人が多いのではと感じます。

それと同じく幼少期に体験したことが大人になっても影響するとの強い思い込みから、大事なのは幼少期と絶対的に幼少期が大事と考える親が多くなっていることです。

一般的にもよく言われる「子どもは真っ白、育て方でどうにでもなる」この言葉も私はとても違和感をもちます。40年近く子どもをみていて、子どもは一人ひとりその子の色をもって生まれてきて、それぞれの年で出す色合いが変わる。同じ色は2つと無い自分の色がどんな色かがわかるのは大人になってから、大人になってもまだわからない人もいます。

自分の色を知るためには他人の色を知り、その色を見て、又は見ながら自分の色を知ることになるのではと思います。自分の色を性格、個性、特長に言い換えるとわかりやすいかと思えます。

「三つ子の魂 百まで」のことわざに置き換えると3歳時期は自分のこだわり、好き嫌い、嬉しい時、悲しい時、困った時、怒った時の反応をストレートに表現するので他人にはとてもわかりやすい。それを自分の色とすれば基本色は生涯変わらない色。しかし他の色を見ることで自分の基本色を基盤にどの色を混ぜれば好きな色になるかにチャレンジするのが生き方だと考えます。好きな色に変えたいと思えば変えることができる。どの色が好きで、どの色はキライと自分でわかることのできる年齢は幼少期では無理、もっと高い年齢だと思うのです。いろいろな色があることをまず知ること。色の理解が友達との付き合いだと考えます。大切なのは幼少期だけではなく、色に興味をもてるように働きかける小、中時期だと思えます。

次のページに載せているのはアトムOG小学校6年生が「少年の主張」という催しで発表した内容を文章化したものです。人間は一直線に成長するのではなく葛藤しながらの成長なのだと言うことがよくわかる内容なので読んでみてください。

私の第一歩

『友だち』それを「ほしくてたまらない」「どういものか知りたい」「うらやましい」という私と「いらぬ」「めんどくさい」「むいてない」「いやだ」という私がありました。その二人の自分はずもぱっくりと割れていて、三人目の自分がそれを見て困っているようでした。

「友だちになろうよ」そう言われたことはたくさんあります。しかし、いつも答えは「いいえ」で、断ったくせに家で悩んでいます。誘ってくれた人はもつといやな思っているのに。いつもそれを繰り返しています。こんな私ですが友だちがいないというわけではありません。私にも友だちと呼べる人がいます。

友だちが近くにいる毎日はずも楽しく、何もないのに胸がいっぱいで、ずも幸せです。思いが違ふ時、その人がいうならと考へ直せたり、何かを考へる時、その人ならどうだろうと思ったりすることもあります。しかし、いつかこわれるのではないか、その人とその人の友だちの間に入ってしまっているのではないかという不安もありました。クラスメートや私の周りの人は優しく、私に冷たく当たったりはしません。修学旅行で泊まるホテルの部屋を決める時です。決め方は修学旅行の実行委員を各部屋に一人ずつ入れて、どの部屋に入りたいか希望を取って人数以上だと話し合ふというものでした。私は実行委員で、その時、覚悟しました。私の部屋には誰も希望せず、話し合ひ、それでも決まらずじゃんけん。負けた人が私の部屋に来る。となることを頭で思ひ描き、実際にそうなっても傷つかないように心にシャッターをしました。しかし、私の部屋を希望する人がいたのです。その瞬間どうしていいのかわからなくなりましたが何故か眼から涙がこぼれてきたので後ろを向きました。これはどうい感情なのかわからないし、それを考へる余裕もありませんでした。家に帰ってからそのことばかり考へていました。でも、いくら考へても分からないだらけでした。「なぜ、私と同じ部屋になろうと思つたのか」「どう考へるとそうなるのか」「私の感情はどうなっているのか」それだけは考へても考へても分かりません。ホテルの部屋は前から休み時間に仲良しの子たちが集まって打ち合わせをしているのをよく見ていたし、私のことが少しいなと思つていても、就学旅行なんて大事な行事でその気持ちを出したりするのでしょうか。今でもわかりません。

私の友だちのイメージも最初から悪かつたのではありません。

最初はずも良いイメージだったのです。でも、学校に入つてクラスの友だちになりたいと思えない子がいる現実や、周りで広がる陰口などから、今の悪いイメージをもつ自分が生まれたのだと思ひます。

その良いイメージと悪いイメージを色で表すと最初は両方とも薄いのです。

「いた方が良いと思ふ」と「いない方が良いと思ふ」ぐらいなのです。そして、良いイメージだと感じる出来事があるとその色は少し濃くなります。反対に悪いイメージだと感じる出来事が起こるとその色も濃くなります。それを何度も繰り返していくうちに、両方の色がずも濃くなって「友だちがほしくてたまらない」と「友だちなんて絶対にいらぬ」という簡単には消えないものになってしまうのです。

私はそんな自分が大嫌いです。今、この自分と真逆のことを思っている自分がいる。どつちが本当の自分かわからない。そういう自分が。だから、この少年の主張にでることになって、わからない自分の気持ちや感情をごまかすのでなく、わからないことを「分からない」と文字に、そして声に表すことができました。

これが私にとっての大きな第一歩だと思ひます。

(小6 F I)

こんな私ですが、今年もよろしくお願ひします！！

仲嶺 真弓

新しい年が明けました。おめでとうございます！！ 今年の干支は午。私、仲嶺は年女。何かいいことがありますようにと願いつつ、胸の内は何かと不安も入り混じる今年のスタートです。

毎年、年の初めにはその年の自分の目標を胸に掲げているのですが、今年はずいぶんとは少し違う心境です。

保護者の方もすでにご存じと思いますが、この3月で現園長・市原が定年退職を迎えます。一緒に仕事を出来るのも残り3ヶ月となりました。もう何年も前からそのことはわかっていたけれど、いざカウントダウンが始まると緊張が走ります。けれど、その緊張感も含めて引き継いでいこうと心に決めているので、今年の目標は、これからの決意表明にもなっているものでいつもと違って当たり前かと自分に言い聞かせています。

そんな今年の始まりだからこそ、今までの自分を少し振り返り、改めて決意表明をすることにしました。



振り返れば、私の人生の分岐点に、なぜかいつも市原がいました。

市原との出会いは27年前の春でした。当時の保育園は全国的に人余りの状況で、保育士として働くには狭き門でした。幾つもの就職試験に落ちまくり、かなり後ろ向きになっていた私は、初対面の市原に「こんなに試験に落ちるといことは、自分には才能がないのか」と思い、保育士

になる夢を諦めようと思っていた。」と語っていました。今考えると、就職活動に来ているのになんてマイナス思考な若者だったかと思ひ恥ずかしいです。でも、そんな私に市原がかけてくれた一言は、「そんなことで夢を諦めるの？ 試験なんかで人生左右されるの？ それに1つや2つの出来事で諦めるのはまだ早すぎる。」 そんなやりとりがアトムで働くスタートとなり今に至ります。働きながら、自分にはまだまだ秘めた力があるかもしれないということに気付いた20歳代の私でした。

第2の分岐点は30歳代半ばの頃。保護者世代も自分より年下の人が増えてきて、独身の私が抱えていた悩みは、「子育て経験のない先生には言うてもわかれへんやろ。」という何気ない言葉でした。何気ない日常会話に出てくるこの言葉に過敏に反応してしまう自分。同僚が保護者と同じ目線で子育ての話をしている姿が、とても羨ましかった時期でした。思い返すと、誰かに責められた訳ではなく、自分で自分の首を絞めていたように思います。そんな私に「子育ての実体験は話せなくても、あんたが何年も保育で見てきた子どものことは話せるやろ。」と市原は言いました。自分に無いものばかりを追いかけずに、自分が手にした物をどう活かさせるかを考える



こと。自分に無いものは誰かの力を借りることの方が大事。そして、人と人との架け橋なら自分にもできるかもしれないということにも気付かされました。

第3の分岐点は4年前。アトム共同保育園の第2園（つまりは現・つばさ共同保育園のことです）を造るか否かという時期でした。この頃の私は、自分は管理職には絶対的に不向きであると思っていたので退職することを考えていました。なので、今だから正直に告白しますが、私は職員の中で第2園を造るということに、反対票を挙げていました。地域に根ざす保育園を造りたいという思いから、アトム共同保育園を育てて、それがやっと定着しつつあるのに、なぜ又、新たな茨の道を行こうとするのか…。私は、新たなことに向かう気力もなく、無責任なことにはできないという思いでいました。その時市原は、「地域住民の要望をそのままにはしておけない。アトムが名乗りを上げなかったとしても保育園はできる。それなら地域住民の声を少しでも反映していけるような保育園が1つでも多い方がいい。だから第2園を造りたいと思った。でも、市原の為に力を貸そうという気持ちで仕事を続けることは止めてほしい。自分はどうしたいのかという視点で自分の答えを出してほしい。」と言いました。大きく気持ちが揺れ動きました。自分の性格上、途中で投げ出すことはできないのでアトムを辞めるとしたら今しかチャンスはない！ 悩んだ末に出したのは、今ここにいる私が答えです。きっとこれから先も、私にできることはたかが知れていると思います。けれど、たかが知れている私でも27年前の自分からしたら大きく成長していると自負しています。5年後・・10年後の私はどんな風にも今の私を見ているのか…。そう考えた時、この仕事を引き継ぐ決意ができました。保育園は1人ひとりの子どもが伸び伸びと健やかに育つ為に大人が何をすべきかを考える場所。大人も育ち合える場所でありたいと私は思います。あり続ける為に努力し続けていくこと。それが今年の目標で、私の決意表明です。

第2回入園式



今年も
よろしく
お願いします。



ストレス大敵

事務室 吉尾由紀枝

2013年、みなさんは、どんな1年だったでしょうか？

私は、徐々に、先が見えない暗いトンネルに入って出られない状態が続いた1年でした。バタバタと忙しい日々の中で、“親として出来ること”を頑張りすぎてしまった結果、ストレスでイライラ、子どもの行動が待てず、こうあってほしいとゆう親目線になり、「教える」姿勢になってしまったのです。それは子どもにとって、学校でのストレスと家でのストレスとの二重パンチで、大爆発して当然ですね。辛い思いをさせてしまったなあと、つくづく反省しています。

子どもの人生にとって大切なことを考えると、自分でやろうとゆう気持ちになれるよう、親が「学ばせる」姿勢になることだなあと、改めて思いました。

そのためには、まず、自分自身の心に余裕を持つこと。イライラした時は、自分なりのストレス解消をしてから、子どもの個性と向き合う。…私は、イライラした時、一人で部屋にこもって、感情を整理します。

自分自身を大切に、2014年が、素敵な1年になりますように。



保育所継続申請にて

事務室 一森すずえ

「来年度はアトムof建て替える間、アトムof園児を受け入れることもあり、人数も増え何かとご迷惑おかけすることもあるかと思いますが、保護者の皆さんと乗り越えて行きたいのでどうぞよろしくお願ひします。」と昨年12月の来年度の継続申請の受付業務の際にできるだけ多くの家庭に声掛けをさせて頂きました。周知されてはいるものの、つばさの保護者はどんな不安を持ってどんな気持ちでいるのだろう。そんなことを思いながらの声掛けでした。しかし、返ってきた答えは、

「わいわいがやがややるからええよ」「子どもも多くなるけど、先生も増えるんやろ？アトム行った先生も帰ってくる可能性もあるんやでな。楽しみ。」「友達も保護者の知り合いも増えるって思っとくわ。」「子どもの新しい刺激になる」とむしろ何が起こるかわからないけど、大丈夫だよと言ってくれている内容がほとんどでした。職員としてこんな心強いことはありません。私もずいぶん前ですが、保護者の立場でした。その時に同じ状況になっていたら、と考えました。来たる状況に何でも子どものプラスになると考えることができたでしょうか。もしかしたら、「なんでこっちで受け入れなあかんの？」「子どもの遊び場所減るやん」と目の前の自分の子どものことだけを考えてしまい、そんな返答する可能性もゼロではない気がするのです。自分に恥ずかしい気持ちと今思い出しても保護者の温かい言葉に感謝の気持ちでいっぱいです。しかし実際、4月が始まるといろいろと不都合なことは出てくると思ひます。その時は、保護者の皆さんと職員と一緒にひとつひとつ試行錯誤し、解決していきたいと思ひます。今年もどうぞよろしくお願ひします。